



「地域で光る
シニアの力」
～いかに生きるか・知と技～



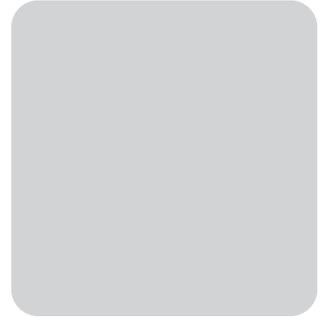
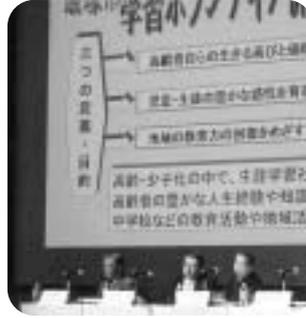
PANEL



DISCUSSION



DISCUSSION



出演者のプロフィール

●コーディネーター



■加藤 栄 (日経BP社『日経マスターズ』編集長)

1956 (昭和31) 年生まれ。慶応義塾大学卒業。
『流行通信』『シティロード』を経て1987年日経マグロウヒル入社 (現・日経BP社)、『日経エンタテインメント』創刊に携わる。1996年『日経PC21』の創刊に副編集長として携わり、1998年編集長に就任。2002年1月、『日経マスターズ』編集長に就任。シニア世代の新しい生き方や価値観の発見を通して、充実したシニアのライフスタイル作りを支援する雑誌として大きな話題を呼んでいる。

●パネリスト(50音順)



■今中 兵一 (福岡県飯塚市学習ボランティア派遣事業 事務局長)

1937 (昭和12) 年生まれ。福岡教育大学卒業後、飯塚市小学校教諭、校長、教育委員、飯塚市社会福祉協議会理事を歴任。現在、飯塚市教育委員会生涯学習課非常勤講師、ふくおか高齢者大学 (コスモス大学) 運営委員などの活動を通じて、高齢者による学習ボランティアと学校を結ぶコーディネーターとして活躍。学習ボランティア派遣活動の事例発表、学社融合等の講演活動も積極的に行っている。



■中城 茂登子 (財)日本シルバーボランティアズ 指導員)

1929 (昭和4) 年、長野県生まれ。夫と死別後小さな縫製工場を経営。1994年、日本語教師養成講座 (1年間) を受講し、終了と同時に日本シルバーボランティアズに洋裁教師と日本語教師の登録をする。これまで、フィリピンのピナツボ火山噴火被災者、スリランカの孤児収容所に併設の手芸学校、ベトナムの5月15日学校 (ストリートチルドレンを収容する学校)、ベトナムの山岳少数民族、ミャンマーの身障者職業訓練センターなどアジア地域で洋裁指導を行う。とても快適とは言い難い厳しい環境の中、「海外には感動がいっぱいある」と何回も海外へ出かけ、洋裁指導を続けている。



■中村 宗哲 (漆芸家 千家十職塗師)

千家十職・塗師第十一代中村宗哲の長女として、京都に生まれる。京都市立美術大学 (現・京都市立芸術大学) 卒。日展、朝日新人展、各種グループ展出品。塗師宗哲後嗣として、伝承資料、技術、意匠の研修に従事。1986年、十二代宗哲を襲名。千家職人として家元へ出仕。月次、伊勢物語、百人一首、天地のかたち、源氏物語をテーマとした彩漆器個展を各地で開催。つどいとくらしの塗り物「哲公房」主宰。著書『中村宗哲歴代作品集』(講談社)、『漆うるはし 塗り物かたり』(淡交社)。1993年京都府文化功労賞受賞。2000年京都市文化功労者表彰。



■堀池 喜一郎 (NPOシニアSOHO普及サロン・三鷹 代表理事)

1941 (昭和16) 年東京生まれ。慶應大学工学部卒業後、(株)日立製作所へ入社。家電品製造工場生産管理、OA推進本部でのパソコンSE、OA事業部での販売教育などを担当。家電サービス会社の取締役を経て、99年「シニアSOHOサロン・三鷹」を設立。2001年同サロンを特定非営利活動法人登記、代表理事に就任。その他、三鷹市の高齢者社会活動マッチング推進事業運営協議会 会長、市民のくらしを守る会議 委員、まちづくり研究所 研究員、リサイクル市民工房 木工技術指導ボランティアとしても活動している。



■牟田 悌三 (俳優、(社福)世田谷ボランティア協会 名誉理事長)

1928 (昭和8) 年東京生まれ。北海道大学農学部在学中、NHK札幌放送演劇団に入り、ラジオに出演。卒業後テレビ、ラジオ、舞台、映画に出演し現在に至る。主な出演作『ホームラン教室』『ケンちゃんシリーズ』『濡つくし』『元禄繚乱』『大地の子』。ラジオ『牟田悌三・あなたのための税金相談』。1986年世田谷ボランティア協会の理事長として地域活動に取り組み、以後活動の中心となる。平成7年~10年、中央教育審議会の専門委員をつとめ、平成10年までの5年間東京農業大学客員教授も兼任。著書「大事な事は、ボランティアで教わった」 文部省選定『むたおじさんのボランティアってなんだろう?』

Panel Discussion



【司会】皆さま大変お待たせいたしました。只今よりパネルディスカッションを開始いたします。本日は「地域で光るシニアの力」～いかに生きるか・知と技～を生かしてというテーマに基づき自らの生き方を切り開き使われました知と技を生かして活躍されている地域の方々をお招きしています。パネラーは今中兵一様 世代間交流から高齢者の「生きる喜び」を追求(福岡県飯塚市学習ボランティア派遣事業事務局長)中城茂登子様 シニアの力で海外協力(財団法人日本シルバーボランティアズ指導員)、中村宗哲様 伝統文化の保存と継承(漆芸家・千家十職塗師)、堀池喜一郎様ITプラットフォームでシニア支援(NPOシニアSOHO普及サロン・三鷹 代表)、牟田悌三様 地域ボランティアにかける思い(俳優・社会福祉法人 世田谷ボランティア協会名誉理事長)の皆様です。コーディネーター・進行役を務められる加藤栄様(日経BP社「日経マスターズ」編集長)お願いいたします。

【加藤】それでは先ず私から自己紹介させていただきます。「日経マスターズ」という雑誌を昨年6月に創刊いたしました。もとビジネスマンの方々に向け、生き甲斐、マイプロジェクトを発見して生き生きしたセカンドライフを送ろうよという雑誌です。その前はパソコンの雑誌の編集長をいたしました。55歳からのパソコン講座というムックを出したこともあり、その縁でなぜか社内ではシニアのことは分かっているのではないかと誤解を招いております。本日お招きした方々といくつぐらいはなれているのでしょうか、まだ46歳ですが、頑張らせていただきます。今日のパネルディスカッションの目的を簡単にお話しておきます。国連の基準では65歳以上が高齢者と言われております。さらに人口の7%を高齢者が占めると高齢化社会と言われており、現在の日本は18%を越え、2010年には24%になると予測されます。55歳以上の方々の経験と知恵が定年退職などをきっかけに失われていく。そのような状況が日本の社会にとって良いことなのだろうか。また

シニアも第二の人生をこれまで以上に豊かに生き生きと暮らしたいと思っている人が多いと思われ
ます。実は大人が幸せになっていないと子どもの
世界も幸せになれないと考えております。そこで今
日お招きした各地域のコミュニティで活躍されてい
る方々に生きた事例をお話しいただいて、皆さま
方が生きていく上でのヒントになればなと考
えます。それでは先ず自己紹介をお願いします。では
最初に今中さんからお願いいたします。



[今中] 皆さんこんにちは。福岡県飯塚市学習ボ
ランティア派遣事業事務局長をしている今中です。私
は37年間の教師生活を定年退職して、平成10年よ
り現在の事業に携わっています。この事業は福岡
県が高齢者の社会参加を目的として2年間のモデ
ル事業を飯塚市に委嘱した事業です。

当時、私は学校の校長をしまして、最初の5年
間は学校現場で学習ボランティアの方々を活用し
ていました。大切な人材として頂いていました。そ
の効果というのが物凄く子供達にとって教育的効
果がありました。少子化、高齢化といろいろな問題
が問われる中で、子供達の持っている交わり能力、
ふれあう力が弱っていると指摘されています。学校
では高齢者の方々に色々の分野で子どもたちと一

緒に頑張ってもらいました。その効果を目の前で実
感して見ていましたので5年経った平成10年退職
して即4月から2代目の事務局長として務め、5年目
を迎えています。もうひとつ福岡県で知事が青少
年のために本部長となって推進している青少年ア
ンビシャス運動を展開しています。このアンビシャ
ス運動に参加しています。私の住む飯塚市菰田にア
ンビシャス広場委員会を立ち上げてその副委員長
をしています。そういったことで子供達を対象にし
た色々なことを高齢者の方々と一緒に展開してい
く実践者でもありコーディネーターとして私の意見
を述べさせていただきます。

[中城] 中城です。私は洋裁の技術を生かして
1995年から毎年のように海外に行っております。今
まで行った国はフィリピン、スリランカ、ベトナム、ミ
ャンマーです、フィリピンではピナツボ火山の罹災者
のところ、スリランカでは孤児院に併設されている
手芸学校、ベトナムではストリートチルドレンの学校
と山岳少数民族のところ、ミャンマーでは身体障害
者の職業訓練センターへ行きました。貧しい國で
皆生きるために一生懸命でした。私が海外で経験
した事、感じた事をお伝えして参考にしてくだされ
ばと思います。

[中村] 中村宗哲でございます。宗哲というのは家
業の名前で隠居名のようなものでして、本名は弘
子と申します。茶の家元、千家や茶人の茶の湯の
道具をつくっていて、特に漆塗りのものをつくっ
ています。十職というのは楽焼、京焼という焼きもの
が2軒、和塗り、唐塗りの漆が2軒、釜とかの鉄、銅、
銀の金のものが2軒、紙、布、木、竹で十軒揃い、
茶の湯の道具を400年近く世襲で受け継いで制作
している仲間のことです。家元と助け合いながら
茶の湯の文化を育ててきました。どういうものをつ



くっているか皆さんにご覧いただこうと東京で昭和60年から個展を開き、楽しんで貰うことにも意義があると、ギャラリーの中で物語りを表現する形をとりました。娘が3人おりまして、一番上は金属で造形を、二番目は私の後を継いでくれ、三番目は父親の陶芸家諏訪蘇山の後を継ぎました。最近私と娘3人で一つの展覧会を開いています。今、源氏物語に取り組んで来月の展覧会に向け、日夜製作に励んでいます。

【堀池】シニアSOHO普及サロン三鷹というNPOの運営をしています。どういう会かという、会社員OBのようなシニア、奥様を対象に文化的な生活体験で得意技、知識、経験を活かした社会活動をするため、お互いに助けながらやっています。スタートの時70人くらいで、3年前にはじめましたが今は270人会員がいて、ITを連絡にうまく使って毎日の業務、お金のやりとりなど月に1600通くらいメーリングリストに書き込まれる会になっています。三鷹市、杉並区、世田谷区などから仕事を頂くようになって、私どもがITのサポートをするとか、主婦の人がホームページをつくったり、今では人件費収入5000万円位、一ヶ月平均4万円位で100人位動いています。テーマがITだけではなく得意技ですから、地域で

一人で何かをやろうという人の会をつくってやっています。

【牟田】25年前から社会の事が気になって、特に子どもたちのことが気になって、少しずつ動かねばということでやってきました。ボランティアは広く色々やってきたことを本にまとめました。タイトルである「大事なことはボランティアで教わった」これが正に私の実感で、色々な人との出会い、その中で発見がある。私にとっては学習である。今は孤立化する子どもたちを受け止める電話、チャイルドラインという活動を世田谷で始めましたが、ニーズがとっても多く7年目になるが28都道府県で53団体の仲間が全国にできまして、子供を受け止めています。電話に出る人のことを受け手さんといい、それは電話相談ではなく、子供の言いたいことを外に出してもらい、自分で何かを感じて解決していくという事のお手伝いをしていくという活動です。受け手さんは50歳までなので、私は受け手さんになれませんが活動の中のいろんな仕事を体当たりでやっています。

■論点 (1)

【加藤】それでは早速本題に入りたいと思います。人々が一番幸せだと考えるのは何かに夢中になっている時ではないか。今日参加の方々は夢中になるものを持っていらっしゃる自分のプロジェクトを持っていると思います。その発端を伺っていききたいと思います。

【今中】仕事を定年退職となるわけですが、校長を辞めると公民館館長、町内会の会長とか役職をされる方が多い中、私は5年間学習ボランティアを活用させていただいた経験がありましたので自分が

どの進路にいくか迷いました。学習ボランティアが子供達に大変な影響があるということでのめり込む中、福岡県が青少年アンビシャス運動の希望者がいないと言われてきたときに地域の人たちと一緒にやり始めました。高齢少子化の中で高齢者自らの生きる喜びを社会参加することによって味わおう、その場を子供達との触れ合いの場に求めたわけです。同時に子供達の道德教育が展開され、学校も活性化するのではないかとというのが目的で、平成13年度は小学校に42回、学習ボランティアが入っています。中学には73回、中学の場合は部活動への参加という実績を持っています。全国的にも学校教育制度が変わり、地域の方々に学校教育を援助してもらうようになってきました。学校教育と社会教育と一体になって子供を教育していこうという中、高齢者の方々を組織し学校の中に入って活動して貰うというのが私の仕事です。

【加藤】 世代間、いろんな立場の違いを越えてうまく融合している印象を持ちました。続きまして中城さん、65歳から海外ボランティアを始められたそうですが、そのきっかけなどをお聞かせください。



【中城】 私は第二の人生を考えた時、今まで出来なかったこと、健康な今だから出来ることは何かと

考えたときに、私の中では海外ボランティアでした。その方法として洋裁教師と日本語教師として登録しました。今まで続けられたのは日本で得られない感動が海外にあるから。例えば、フィリピンのピナツボ火山の罹災者のところで、最後の日にファッションショーをしました。家を失い、泥まみれの災害の後、一時であれ、女性の美しくありたい、着飾ってみたいという気持ちが満たされて幸せそうだった。山岳少数民族の子どもたちはハサミも知らなかったのですが、自分の手で服が仕上がった時の嬉しそうな感動を共有できます。自分自身も励まされ、ボランティアに生き甲斐を感じました。

【加藤】 感動の共有というキーワードがでました。続きまして中村さん、50歳はまだ半人前という伝統の世界にお生まれになって、継がれる時にはそれなりの思いがと想像されるのですが。

【中村】 物づくりの家ですが、強制的に継げと言われたことはなかった。戦争で職人衆もいなくなり家族だけになりました。敗戦になったときはどうなるのかと大変ショックでしたが、当時の男女平等の風にあふれて女性でも出来ないかと考え、親に相談もなしに美術の大学に行き、自分で継ぐ決心をしました。そのもとは祖母で、明治維新で茶の湯の家業が成り立たず廃業した父の8代が京都で最初の女子教育を受けさせて教育者に仕上げた。その後茶の礼法を子どもたちに伝えたり、家業を復興させましたが女性は当時家業の当主を継げませんでした。それでも物さえつくっていれば作品が残る前例を見ていたので私も家業を継ごうと考えました。

【加藤】 わかりました。続いて堀池さん。

【堀池】 今日お集まりの方は大企業で組織で仕事



をしてきた方も多と思いますが、私もまさに企業戦士として約40年過ごして仕事を覚え、俺が俺がと面白い仕事をさせてもらっていました。50歳過ぎた頃にはこれでよいのかと考えていた時にパソコン、インターネットに出会い、組織の中で仕事をするのではなく得意技を活かす仕事にいずれつかなければと感じていました。その中でSOHO(スモールオフィス、ホームオフィス)という言葉ができました。アメリカでは高齢者が家で仕事をしているのが2000万世帯、日本は200万世帯、なぜこんなに差があるのかと考えると日本は高齢者は定年になったら若い者に渡すという文化があります。これではSOHOは日本では発展しないだろうとの話の中で、40~50代から会社で副業をやる会を始めて、土日にインターネットでお手伝いをするということを数年やってました。その中、三鷹でパソコン教室をやってくださいということで始め、シニアSOHOの前身のパソコン教室に繋がり、通産省の補助金ももらいました。この時は片手間で、会社と両立できていましたが、続くうちに両立が難しくなり、選択の結果、定年の前に会社を辞めてしまいました。現在いろんな問い合わせや講演などで会社時代より忙しくなっていますが、なぜかという、会社勤めをしていると地域のことが分からない、区役所にもいった

ことがない、商工会議所が何をしているかも分からない。こういう人が会社を辞めて何か自分の特技を活かして何かをしようとした時に、誰と話したらいいのか分からない、一種の情報障害者みたいになっている。そこでプラットフォームとして、インターネットができる、電子メールができる、自分がしたいことを考えてみる、もう一つ、地域に自分のスキルを発信する、この3点をやろうと決めたと、沢山の人が集まってきてスタートしたということです。最近では2月15日雑誌フォーサイトで「悠悠自適よさらば」と紹介されてるように、社会を支える仕事もするようになりました。その一つがインターネットでやりたいことを登録、仕事依頼閲覧表を見て応募してきた人との紹介、マッチングをする。シニア市民が何かをするということを繋ぐという「いきいきプラス」事務局を三鷹市からの委託でやっています。

【加藤】 それでは牟田さん。ボランティアへのきっかけなどいろいろところで語られていますが、今日はもっと深いところまでお聞かせ下さい。

【牟田】 本当に運命的というか、5年5ヶ月で子供が5人、学校にお世話になるということでPTAの会長を引き受けたのですが、役者をやっている時には全





然気がつかなかった色々な問題が見えてきて、このままでいいのかという問題意識が生き方を変えてくれた気がします。具体的に動いたのは22年前位からですが、中学生の非行暴力の問題が起きてきて、それにどうやって対応しようかという中で私は先程のチャイルドラインもそうですが、子供が自分で見つけてくれなければはじまらない。上から管理していこうとか、そんな方向が、また近頃出てきはじめてきましたが、子供が変わるわけがない。子供が自分で見つけられるという方向をつくっていかねばと思い、その頃非行暴力が中学に押し寄せてきて、どうやったらいいのかという中で考えてみたら、皆さんも体験されたと思いますが、物の不足の時代がありましたね。物がなくて食べ物なくて、本当に困った時代もありました。不足があると人間はやはり欲しいという意欲につながるもので食べ物がないと食べたいという食欲につながるのです

が、しかし子供達を見てみるとそういう意欲がなんか停滞しているなあとそこで彼等に不足をあげようという所から私の活動がはじまりました。逆に不足をあげるべきだということで、まず不足があるということを知ってもらわなければはじまらないわけですから、そこで思い当たったのがハンデキャップという不足でありまして我々の目の前に障害という不足をもった方々とお付き合い頂く中で不足というものが厳然とあるということをものあたりにしてそこで人間としてそういう不足をもった人とお付き合いするにはどうしたらよいか彼等自身が考えていく。そういう状態をつくろうとこの活動を10年間やりました。その中で私自身中学生諸君から色々なことを教わりました。大人ではとても気がつかないことを彼等は気がついてくれて、そういうメッセージを我々に伝えてくれるわけなのです。そういうことから私はボランティアというのは奉仕とは違うなあとということに気

がつかしました。奉仕というのは、やはり一方的に自己犠牲して何かをして差上げるといこと。ところが差上げておきまして相手がどうもありがとうと感謝をして頂ければ結構なのですが、そんなのいらないうと云われたら、どうします。冗談じゃないよ。せっかくなのであげようと思ったのにとことになってしまつて、そこで人間関係が切れてしまふ。それでは続けてやることが出来ないわけで、そこでどうか今はいらぬのか、じゃ何がぬのかな。ということを考える—反省材料を頂けるわけで、だから私はボランティアというのは頂くことが非常に重要だといふふうに考えています。つまり学習をするということですね。頂いてやろうということですね。あげながら頂いちゃう、そこに双方向の関係が生まれてくるわけですね。ですから奉仕といつと一方的にあげるといこと、だだけボランティアといつのはそうではなく、あげたりもらったりですね。だからあげようと思つとどうしてもあげぬ方が優位になつてしまふのですね。これじゃ人間関係はつくれない。あげながらもらつとする、こちらももらいながらあぬ人が気がついてぬことを何か知らせてあげようと思つ。そこで限りなく対等な人間関係が生まれ、それがノーマルな人間関係、ノーマライゼーションといつことなんですね。そういう方向をつくつていくといつことはボランティアの大きな役割なんだなといつことを感じるようになった。だからボランティアといつのは生涯体験学習ではないかといつ風に考えるよふになりました。この学習をしようといつ姿勢があるとなつとでは人間関係をつくつていく上でかなり違つと思つのですよ。だから相手が言ふことがくだらぬといか違つなと思つても、なんでこの人はこう違つことを言ふのだらつと一方的に退けてしまふのではなく、その人には何かあるのだ何かこう考える理由があるのだといふふうに考える、そういう姿勢を今皆さまが個々に自主的にそういう姿勢を持って生きる

生き方をして頂ければ、こんなに人間関係が干からびてしまつた時代に新たな水分を補ふことが出来るのではないかと思つます。だから本当に考え方ひとつで社会が変わつていくのではないか、そういう社会を何とかつくつていきたいなあといつ方向で生きています。私も高齢者といつ言葉は嫌いで、私は老人までなかなかいってぬ、まして大老人などともいぬ。私は旧制中学2年の時に国語漢文の際、先生に「老とは衰えではない、老とは達することである。老人とは達人の意である。」といわれたのがずっと残つています。だから、達人である老人を目指そうと、といふふうに若者に向かつて私は一生懸命に言つているのです。いろいろな



世代があります。それぞれの世代が達人を目指してやがつて達人になる。そういう段階みたいぬものを踏む必要があります。それは色々な人とつき合つて色々な事を学習して、そして人間として幅の広い心豊かな人間になる、それを目指すといつこと、私は命と人権を守るまちづくりを最終的に目指しています。そして命を考えると地球環境の問題をほつとけませぬね。まさに押し寄せる問題を、国の利害で先送りする傾向があるけれど、日本の国だけがよくなるといつことはあり得ぬのですから世界中の人類がそういう方向に向いて、みんなしてこの地球環境を守つていくといつ方向をつくらぬ限り、この人類は生存できぬ訳ですから、そういうことも視

野に入れて生きていただきたいと思います。だからボランティアというのは極論ですが寝たきりになってもボランティアが出来ると思っています。それは介護して頂く方により素晴らしい介護の仕方を伝えるというボランティアが出来るとは思いませんか。ボランティアというのは人間が生きる上でそんな基本的なことではないかと私は考えています。

■論点 (2)

【加藤】 ありがとうございます。大変よいお話でした。老とは達することであるとはいいい言葉ですね。このパネルディスカッションに参加されている皆さんに共通しているのは双方向コミュニケーションをやっていることなんだと思います。今中さんは世代間交流、中城さんは国際間交流、中村さんは日本の伝統と現代、堀池さんは同質な人同士の交流、同世代交流、牟田さんは世代間の交流と個性と個性の交流なのではないかと思えます。コミュニケーションは難しいものがあって、きっと皆さんのそのプロジェクトを成し遂げていく時にいろんなギャップがあると思います。先ほど中村さんのお話で男の世界の中でなかなか女性が、というお話もありました。これから先、皆さんがプロジェクトをやっていくに当たっていろいろな困難、ギャップがあると思います。その辺のお話を伺っていききたいと思います。今中さんは当然世代間のコミュニケーションを促しながら例えば行政とのいろんな所と連携しなければコミュニケーションとかならない訳ですね。そんなご苦労とか何かございますか。

【今中】 一寸これを見て頂きたいのですが、2001年に文部科学省がだしたレインボープランです。これが基本になって各学校現場は頑張っているのですね。その前は平成10年に開かれた学校づくりを



やれというキーワードがあるし、その前に生きる力を云々というのができてきたわけです。これをご覧になるとわかるように一番目はこの学校の専門職ですね。先生は教育のプロですね。二番三番四番目あたりが学習ボランティアとして、何か援助できるかなあという感じになってきます。あと、このあたりは行政としての仕事であろうと思っているのです。そういうふうに大きくは文部科学省から流れてくる教育政策に基づいて学校現場は努力しています。それを学校の先生は勿論、一般の住民なり学習ボランティアの方達がどの程度理解できるのか、そしてどうプログラムをつくるのか、それが一つの大きな悩みなのです。そこにしているのは一応新しい教育課程の中で是非、学校に取り入れて欲しい方針なのです。この中に沢山出てきているのは学校教育の中に地域の方々、色々な貴重な体験をもっているの方々を取り入れて授業を行いなさいよ、子どもを育てる上で色々な知恵をかりなさい、というのが簡単に言うと方針なのです。それをどう具体化していくかは私の仕事だと思うし体験学習、体験学習、と指摘されていますが、今の子供たちは色々な事を自分でしないで家の親にしてもらい、周りの人達からしてもらい、全てしてもらい側で、体験がないと言われている。そして体験学習を第一、第二、第三次体験という形で積み重ね、面白いですよ学校教育は一学び方を学ぶ学習を子どもはしていると言うのです。そして一方私達が担当している学習ボランティアはこの学習で学んでいるものを促進し援助的役割をしている。ここのところをどう理解するのか、我々学習ボランティアは学校に行き行って教えよう、伝えようとするのです。そうすると失敗してしまう。そこで子供たちとの交流を、人間的な触れ合いを一番大切に、まず子どもたちと遊んでください。その中で人間的感性が磨かれていくし、中学生は達人という言葉をつかうし小学生

はオジサン、ゲストティーチャーとか呼びます。そういう形で知恵と技の伝承が初めて子どもとの心の糸がつながった時に成立する。どこの自治体でも学習ボランティアの募集をしています。竹とんぼ、おはじきと簡単に出来ることを学校は求めているので各学校、社会教育という形で単に高齢者の方達だけではなく学習ボランティアが子ども達と接する場を行政側がまずつくって、そして学校教育は校長会とか教頭会とかでしっかり、社会教育は公民館で、PTAは今までと違って活動の拡がりを地域の中へ、学校の中だけの活動だけではだめではないでしょうか。そういう訳で今、克服のために啓発させて頂いてます。この啓発活動が大事になってきていると思って頑張っています。

【加藤】 続きまして中城さん、海外でのボランティアというのは国と国、自分の文化と現地の文化と全く異なるところでのコミュニケーションということですよ。ご苦労をお聞かせください。



【中城】 たくさんありますけれど、まず言葉です。私の育った時代は英語を全然勉強しなかったのです。外国に行くにはまず、英語を勉強しなければということで学校に通いました。ストレスが溜まってダメなんですね。これは度胸で乗り切るしかない

思っで行きました。逆に言葉の通じないことをコミュニケーションの手段にするしかないと思ったのです。何か相手に伝えようとして一生懸命身振り手振りで伝えますよね。わかりあう喜びというか一歩相手と近づいた思いがします。本当は出来ることに超したことはないし、出来ない事がそんなふうに分かたりに克服したのですが、それと技術を教えるのは比較的具体的なことなので、私は次のような方法をとりました。例えば、サンプルを二つ作っていい方を○、悪い方に×をつけて目で見て教えて、まだ分からない子の中に何人か手先が器用で頭の回転が速い子がいるのでそういう子を見つけて、その子に教えてあげてくださいという、聞く方も聞きやすい、その方法は割とうまくいきました。山岳民族の子どもは学校にも行ってない子もいて、メジャーの読み方も知らないのです。それは自分で特別な方法を考えて教えてあげた。

海外ですので思いもよらないことが沢山ありますが、逆に見えなかった部分が見えて来るようになるのです。その一つがベトナムで山岳民族の所に行っている時、別動隊に医療班が来ていてその中にアメリカの黒人の大学生がいたが村民はスパイだと言って私まで巻き添えになり、警察に三日間足留めをくって仕事が出来なかった。最悪の場合を想定して覚悟を決めた。自分で腹を決めておかないと精神的なダメージが大きいのです、この時は三日目に帰されましたのでよかったのですが、ベトナム戦争が4半世紀たっても戦争のかけを引きずっている驚きと社会から未だに隔離されている人達であることを知りました。フィリピンではザックの横を切られてパスポートや現金を取られました。警察に言って盗難届の受理証明を交渉したが、埒があかないので200ペソを机に置いたら、いきなりOK。そんな調子で公然と賄賂がまかり通っている。海外で生きるにはあらゆる知恵をしぼって何かしな

ければならない。最悪の事態を想定して腹をくくることも必要です。

【加藤】中城さんのお姿からは踏み出す勇気と現地に行ってから度胸は想像し難いものがありますが…。それでは今度は中村さんにうかがいましょう。中村さんは先程、男の世界のお話でしたが、伝統の中で女性としてやっていかれる事は大変なことですねその辺はいかがですか。



【中村】伝統社会での男性と女性という所に辿り着くまでに私が目指した美術大学、それは戦後ですから欧米の新しい美術教育をやっている場所だったのです。というのは日本の伝統を完全に否定していました。私どもの家業のような伝統的なものは壊せと先生や学友が言う。何が違うのかと考えると、いろんな工芸の素材を使って自己を表現するのが大事だ。伝統工芸は個性を出さずに用いるに傾いていると。私も新しいものが好きで大きいものをつくりたく、畳大の屏風を日展に出したりして、評価をいただいて続けていました。その時、家業の漆器を毎日父がつくっているのを見て自分のつくったものは何処に使われるのか。自分の作品は展覧会に持って行って目立たなければならない。



目立たなければ評価が得られない。父のつくっているものは一つだけが目立っているのではなく茶室で他の作品と一緒に美を演出しているということをふっと思いました。新しい価値観が生まれる時代というのは新しいものばかりを押し出していきますが、それが全てだと思っただけいけないのだと思います。色々な価値観があって、そこに欧米式の新しい価値観が一つ加わってくる時なのだなあと感じてね。それから家業にはっきり向き合う事に決めました。そしていよいよ家業に向き合うと伝統の世界で、しかも茶の湯の家元は武家社会の組織となっていて、女性の座る場所がないわけです。ですから、ある程度実績を積んでこれだけのものが出来るんだということを見て頂く、そして女性の役割になっている事もきちんとやってしまうということは、男性以上の事をしてないと認められないというような覚悟がありました。それだけやり甲斐があったのかもしれません。大体前の代が無くなって代を継ぐのですが、そういう私を正式の場所

に出すために父は85歳になって我が家ではじめて隠居をして、無言ながら家元に家業を継ぐことをお認め頂いたと思っています。仲間にも了解して頂き初めて女性として12代を継ぎましたが、それが53歳でした。お茶の世界は色々修行をつんで心を豊かに育ててからはじめて人と交流が出来るという世界ですから。物づくりもやはり年を重ねた美しさを大切にします。せまい茶室の中で舞台装置としてはまったく究極の場が用意されているわけですね。その中で人と人が交流するということはすごい事だし、それだけではなく人と物が交流する。そのうえ物と物とが交流するのです。物に生命を感じます。仕事を積み重ねていますと、何か子どもを胎内で育てている気がするのです。それと作品が仕上がった時が赤ん坊が生まれた時。生むまではつくり手の仕事、今度それを育てるのは使う人の仕事なのです。ですから日本では物を手に入ると年月日を入れたりしますね、ものを人と同じように考えるのが日本人なのですね。そういう物への

愛情が茶の湯の中に一杯ありますから茶の湯のものをつくる私は物づくりとして非常に有難いことだと思うのです。今年71歳ですが年齢が高くてもそんな姿勢で仕事ができるのはうれしい事だと思っています。

【加藤】ありがとうございます。では堀池さん、ビジネスの世界は現実的に男の社会になっているわけですが、いかがですか。その辺のご苦労はいかがでしょう。



【堀池】今、中村さんの話に感動しました。新しい時代に洗われて、ずっと続いている物を再発見するという事は素晴らしいことだなあと感動しました。私達も工場物づくりしてたのを思い出してたのですが、今この活動をやっている感動しているのは何かというと地域に会社のOBの人で、ない仕事がないくらい居るんですね。あらゆる職業のものすごいベテランが60歳前後の人がひしめいているというのが東京の近郊の都市なのですね。これが行政の人がシニアSOHOにこれだけの人が集まっているというのはすごいねと言われて、意味が分からなかったのですが、行政からみるとどういう人で何歳の人がどういう税金を払っているかが分かるのですが、その人がどんな仕事をしようとしている



のか、こういうことに興味をもっているのか全く分かってない。私達の活動はそれが分かったらものすごい宝ですねということにつながっている。うちに入会してくる人たちに私達は会社の名前は決してきかない。でも得意技は何ですかと聞くと、編集をしたとか写真技術がある、お金の運用など色々な人が200人揃ってる。ただその人が本当にやるのかどうか、一つの乗り越えなければならないギャップである。

写真を見てください。三鷹市立第四小学校の四年生の総合的学習で、昨年「僕ら生き生きピーナツマン」という、ピーナツの料理、栽培などを学んでみようかと子ども達が計画した。先生はテーマを指導しない。ではどうやって勉強するのかというと。インターネットで調べたり、どこかにお願いする。それが私たちのサポートのところへとんでくる。それで農家を探そう、料理屋に行ってみよう、うちの会員がいっぱいいるから時々そういう農家があって、そこにつないだパソコンからネットワークにビデオレターで農家からインターネットで子供たちに流す。そしてその操作をサポートが行って編集して子ども達と質疑応答をする。こうした事は大変で、銀行のこ



とは銀行家を学校に連れていけば出来るというような簡単な事ではない。子ども達の学習プロセスに合わせてしていくことをしないと、全く新しい世界で生き生きとした子ども達の顔が見られる、子ども達が色々なことを発見するような「生きる力」の学習にはならない。子どもたちが一番嬉しいのは大の大人と会話がパソコンで出来ることです。すごく嬉しい。例えば基礎学力でもそれがあるのですが、物を頼む時に丁寧に話す敬語の使い方の科目で「コミュニケーションって何だ」という国語の時間があるのですが、それが終わった後先生が宿題をグループごとに出すのです。それを子ども達は掲示板に書く。メンターという手伝いをする地域の人、名のり出た8人が子ども達とディスカッションする。おじさんはこうなのよと子ども達とやりとりを電子メールの掲示板ですることが国語の授業なのです。それをみんな保護者達がインターネットでリアルタイムに自宅で見れるというのが今新しい学校の姿です。ものすごく盛り上がっています。こういう仕事は手伝うとか簡単にやらせてくださいという程度では出来ないのです。これが問題です。市のパソコン無料常設相談コーナーでシニアSOHOの会員が相談員をしています。この写真のように並んで待っている状態、この相談員はとても

大変な仕事で何を聞かれるか分からない、パソコンの買い方からソフトの使い方まで聞きに来る、この相談員には技術をよく知っている人より、共感してうまを合わせる人の方がよい。こういうことの出来る人がどんどん登場して欲しいのですが、それが難しい。ところが地域のシニアにはには教えることを教える専門家もいて、それは教えてはいけない、体験させるのだ、失敗させるのが大事という考え方のパソコン初心者講習方式をつくった。このビデオは全くの初心者講習の風景です。2人1組みで、アドバイザーのシニアは生徒が理解しているかどうかを見ている、体験して自分が楽しく出来るのだなあという自信をつくり出せばよい。97%の人が大満足して帰るという教室が実現したのです。町の宝を活用していくことともう一つはこの授業はこういうふう出来るのですよ、というシニアPCアドバイザー研修を17回、160人の人を育成した。今やアドバイザーで自信を持って教えることができる人が166人出きました。しっかりした教え方をつくらなければ出来ないという考え方です。

もう一つはお金の問題ですね。財源で有償か無償ですかという問題ですね。無償でやるのは続かない。これは何時まで無償というようにきちんと納得して進めて行く事が大事です。それにはNPOとした事が良かったと思います。物事ははっきりさせ



る、説明する、自分の態度を決めていく、その段取りが大事です。

【加藤】有難うございました。牟田さんは何かボランティア活動の中で工夫なさったりしていることはございますか。

【牟田】堀池さんと重複部分が多いです。どうやったらボランティアを楽しめるかということですね。今おっしゃいましたようにとにかく人間関係は手間暇のかかるものだという認識をもって頂きたいのと、



手間暇のかかることに挑戦するのが我々でありまして、逆に言いますと今堀池さんのご苦労というのがひしひしと分るのでこうやったらどうだろうという事が思い浮かんだりするのですが、この瞬間がボランティアの楽しみで、だからそれが完璧にやってみてうまくいくと止められない。そんなふうにつっこんでいくと色々な展開があって面白いのではないかと思います。8年ぐらい前に「お父さんパワー今が見せ時」というんでお母さんはちゃんと地域と関わって生きてらっしゃるけど、お父さんはチャンスがなくて出来ない。そういう方々にお母さんやお子さんから尊敬される方法を教えますというイベントをもったのです。その中で4つの方法の一つは趣味

応用タイプ、趣味を通じて仲間づくりをして趣味を極めていく中で、この趣味をつかって社会に何か出来ないかしらという事から出発して色々展開をしていく。二つ目は仕事応用タイプ、色々な職業を持っている方々、その仕事を使ってその仕事を社会にどう役立てられるかと。三つ目は地域参加タイプ。地域の中の色々な問題を見つけてそして仲間を集めて動いていく。つまりPTAなども三番目に入る。四番目は国際交流タイプ。これはボランティア協会の一番大きな勢力でありまして外国人に日本語を教えるボランティアです。マンツーマンで一つの部屋の中に30組ぐらいでやる。一方的に日本語を教えるのではなく相手の文化も学習出来る、二人の間が深くなっていくと国際交流になっていく。色々なやり方があるし、それを考えていく、見い出していく。皆さんがやってみた事がないことを見つけ、やってみて、成功すると次のエネルギーになる。人間は何が幸せなのか、私は人間は日々発見のある、そして感動がある日々だと思います。感動があるということはプロセスをクリアして、何かが達成した時、やったあとという大きな感動があるわけで、そういう感動を子供たちに何とか味わってもらおうということで、学校の先生達に感動をあげられることを考えてくださいと申しあげている。先程の総合学習の時間というのは私が中教審の時につくり上げたのですね。あれは結局そういう事なのです。確かにペーパーで知識を得るのも結構です。それだけでなく人間が動いてぶつかって生きている訳ですから、ぶつかり方も憶えなければならぬ。それには体験が必要である。だから総合的な学習時間ということです。文部省が学習要領でトップダウンでやっていたことでなく、個々の学校で見つけてやってくださいよ、という提言ですよ。だからこれからは皆さまがひとりひとりがそういう思いを持って頂くという事が必要だと思います。

[加藤] 私から質問させていただきますが、男性がなかなかその地域のコミュニティに入っていけないという現実があります。うちの雑誌でも冗談でオジサン公園デビュー特集をやるかといったぐらいなんです。男性は割とコミュニティーに入るのが苦手な部分がある。そこが一つのギャップかな。その難しさを乗り越えるためにこういうふうにと考えると何か考えがあれば教えてください。

[牟田] お母さん達はふぁっと話が出来てしまいですね。お父さんだけが集まるとお互いに意識し合っただけで話にならないそんな雰囲気になる。どうしたらよいかと思って、その次の会の時に缶ビールを置いて、ひとつ飲みながら話をしようとするのとたんには色々な本音が出てきて、同業者同士では話せなかった本格的な話が出てくる。一端結束するとお父さんはかなり執着します。

[堀池] 一番私ども、やって面白いなと思うのは交流会ですね。月例交流会ということで、1.5カ月月に一回やっています。何かをやるにしても資格を取ったら仕事に来るわけではない。誰かが教えてくれたことが仕事になる訳ではないので、自分とは何かを考えなくてはならない。考えることはしゃべる事であるということで、飲み会をやるのですが、始めた第1回には70人の会員の中47人来てそのまま一人1分間スピーチをやった。一番高齢のかたが「自己実現を大声で叫んでしゃべれるところがこんな近くで毎月、こんな素晴らしい事はない」と言って、みんな拍手したのです。そういう会かということで始まりました。それ以来毎回80人集まっているのです。事例報告をやってそれを質疑応答を二本やると一時間、その後、飲み会2時間、立食パーティーです。自分発見の会であり、とにかく人に出会える場である。だいたいそれで終わらない。2次会、

3次会があり、家に帰ってすぐメールを書く。それを読むのがまたおもしろい。これって男社会の手法ですよ。男社会じゃないかという批判もありますが。



[牟田] 先程のお父さんの会で料理の趣味の会があって男だけで女房に内緒で修行してうまくなりたいと集まって二年三年たったらなんと半数が女性になっていた。これは自然の形だと思うんですね。

[加藤] 堀池さんのところもそうなる可能性があるかも知れないですね。男性としてはコミュニティーに参加するときは女性の生き方を手本にすることも考えた方がいいのかもしれないですね。

■論点 (3)

[加藤] 時間が迫ってきましたので、最後に皆さんにこれからのマイプロジェクトを会場の皆さま、また社会への提言をお一人ずつ頂いて終了したいと思います。今中さん。

[今中] 今、お話を聞きながら私が今ここにいるのは誰の力なのかと思いました。そのために飯塚市から65歳になる同級生で妻を連れてきました。結婚40年になります、ひとつの節目です。今の仕事は飯塚市の臨時職員という立場で65歳を迎え第2の



定年を迎えるわけです。そんな親父の生き様を見せたいと思って沖縄から息子も来ています。パネルをご覧のように、学校週5日制を迎え子ども達の教育環境は変わったという事はぜひ認識してください。大人のように時間をコントロール出来ません。土曜日は完全に休みになり、月火水木金の5日間の学校教育になった。体内時計のリズムをつくり上げて行かなければならない教育を学校だけでなく地域と学校でつくっていかう。すなわち学社融合を推進していかうということです。生涯学習というのは地域の実態をよく見て、それを取り入れ、進めることが大切ではないでしょうか。飯塚市では公民館の職員と学習ボランティアの地域住民と学校の先生達と三者が一堂に会して中学校区単位で集まって、これからの子育てをどうするかという協議を平成13年度から始めました。学校関係は1600人分、地域には300人分これは、活動費は2000円/一回。これだけの予算を市で確保しているということで

す。福岡県のやっているアンビシャス運動は公民館区と中学校区と一緒にやっていくというスタイルになっています。中核になるのは直接子どもと関係している諸団体、その周りを各種団体がやって、地域住民が見るといいう形になろうかと思えます。具体的には青少年健全育成会、母親クラブ、子ども会指導者連絡協議会、小・中学校PTA、子育てサークル、この団体が地域によって弱体化しているといわれている。だから色々な団体を横つなぎで情報交換をしていくという活動を小さな行政区菰田というところでしています。情報を共有化して菰田ホームページに立ち上げ、情報誌にまとめ、配布する。地域社会は向こう三軒両隣り、自分の足下が一番肝心でそこを見つめ直そう、そしてそれを支えているのが家族であると思えます。そして皆さん、子ども達に力をかしてください、宜しくお願いいたします。

【加藤】家族というお話が出ました。中城さん、お願いいたします。

【中城】海外ボランティアに限って言いますと、まず健康に自信がある事が一番です。それと途上国の生活向上に役立つ技術をもっていること。それは特に資格があるとかではなくても、会社で長年やって来た仕事が役に立つ場合があります、床屋さんなんか活躍されている人もいますし、ですから、そういう団体にご希望のある方はご相談なさったらよろしいと思います。それと一步踏み出す勇気です。例えば私が最初に行ったフィリピンは行く時は本当におっかなびっくりでした。でも帰る時は心引かれて帰ってきました。皆、昔の貧しかった日本のような人情を持った人たちが住んでいます。それと生きがい寿命というものがあるとすれば、それは向こうからやってくるのではなく自分自身が求めるしかないと思います。質問の中に費用の件がありました。それは色々なケースによって違いますし一概には言えませんが私の場合で言いますと渡航費は出して頂きました。向こうの生活費が出る場合と出ない場合があります。例えば、物価の安いところでは贅沢しなければそんなにかからないと思います。ベトナムの学校の先生の給料が50ドルですから、それから考えるとそんなにかからないと思います。私の行った国は治安も衛生も悪く言葉も文化も違うところなので孤独で不安がありました。でもそうした中でありったけの知恵をしぼって生きていくということが何か自分の中の眠っていた遺伝子が目をさまして心がリフレッシュされたような満足感が残ります。新しい世界をみて新しい経験をして新しい人たちに出逢って、私は倍人生を生きたような気がいたします。体の続く限り向こうから要請のある限りこの活動は続けていきたいと思えます。このスライドはフィリピンの作業風景やファッション

ショーの写真です。日本の着物を使って洋服を作り、アメリカや日本でバザーを開いてその収益金を現地に還元するようにしています。ありがとうございました。



【加藤】笑顔の素敵な写真でした。続きまして中村さん、お願いいたします。

【中村】先のお話しにもありましたように今のシニア世代、戦争あの変革の時代を共有出来る人達です。ね、ああいう時代を経たことは大変であったが、ある意味では視野が広くなりまして、感受性も豊かになったのではないかと今になって思います。そういう世代がシニア世代ではないかと思えます。今日も京都を朝早く発ってきたのですが電車の窓からの景色、川岸とか中洲とか山裾に枯れ草がすごくきれいな輝くような色であちこちに見えたのです。ね。きっとあの枯れ草の下には若い草の芽が伸びようとしているのでしょうね。今日のお話を聞いていると、シニアはあのように輝いているのではないかなあという思いがしました。ですから私たちの世代が今一番美しい充実した世代と思えるのです。それはやはり茶の湯というのもやはりシニア世代の五感が熟して、一番いい茶会という場を用意す

ることが出来る人達であるのと似ています。そういう人達が人と人と交わる真実の交流の場をつくるのだという気がします。古今の茶人の書いたお茶の湯の本を読んでいきますとどんなに心を砕いて、どんなに清く美しくその場を用意しているのか、それは人への愛なのです。だから従来の様式をもてなくても、そういう気持ちで先ほどの一ヶ月に一回の飲み会のように交流の場を用意できたら楽しいことだと思います。私は茶の湯の中に日本の伝統的な愛と美とがいっぱいあるので現代の社会に生かしていきたいのです。漆のお椀に炊きたての真白いご飯を入れたらどんなに美味しいか、漆のお椀が焼き物の茶碗に変わったのは大正から昭和のはじめのころです。大量生産の窯の技術が日本にはあったからです。それと引き換えに漆のお椀が姿を消していった。でも美しいもの、暖かいもの、いい食器はもういっぺん使ってみたいので私共は大きいお椀にはご飯、小さいお椀はみそ汁に、お椀の蓋と身をいれこにするとコンパクトに収納出来る、それは茶の湯の方法また禅僧の坊さんの方法なのです。そして、食器を手にとり口に運ぶ日本の食の様式の原点なのです。そういう現代に通じるものが一杯ありますから今なんとかして若い世代につないでいきたいと思います。シニア世代もいいものを次の世代に引き継いで欲しいなと思います。そのほか女性として思うことですが、この間新生児の孫を預かって、ミルクを作ったのですが、そのときに抱きながらぱつと作れたのですね、これは自分の経験があったること、若いお母さん達が一寸子どもをみてくださいというような人手が欲しいのです。女性にはそういう特技がいっぱいありますから、役立てたらいいなと思います。皆さん頑張りましょう。

【加藤】ありがとうございます。

【堀池】今お話しがあった子育てのことにしても65歳まで生きていけば人に役立つことは沢山もっている、だからそのひとつにお子さんの相手が出来ますよと「できます」ページに書いてあればそこに頼める。それは立派な活動なのです。そんなふうなのが「いきいきプラス」なのです。私はそれを受けて皆さんにこれから活動したいという人には一言、電子メールが出来ようになりなさいと言います。今の「三鷹いきいきプラス」では毎日それが出てくるわけで、色々な人が活動している事が毎日見れるわけです。今その事務局は無料の電子メール



教室を始めているのです。皆さんが家でメールが書けるようになること、これがひとつ。それから今日お集まりの方々は何かグループをやっていてその運営をどうしたらよいかと考えていられる方も多いと思いますが、運営について私が最も思っていることは続くということです。補助金でもいいが行政との連携の活動、個々の方からお金をいただく、私は無償でもいいよとハッキリさせる。この仕事はいつまで出来ます、お金はこうなっていますということをする。少額でもお金をいただいて責任有ることをする、困難なことでもこう出来ますよと見積もりを出す。それを事業型のNPOというそうです。事業型でやっていくべきではないかと思っています。東京都



は15年位たつと高齢者が増え日本一になる。そして地方交付税がなくなって福祉予算なんかはどうなるのか。NPO法人も事業型の運営に徹しなければならぬと思います。そういう意味ではグループをつくる人は必ずホームページをつくりなさい。ホームページをつくと背筋が伸びるということになります。自分がこういうことをしますと書くわけですから。私共はこうした事業型のグループを応援する態勢をつくっていきたいと思います。最後に体験的に申しますとシニアの方はゆっくりやるということ、先の三浦先生のお話ですが徹底的に拘ってやるということ、それがまとまって実現するのは半年とか1年とか、かかる。そしてずっと拘り続けると何かが出来る。ですから世の中パソコンなどがどんどん進歩してスピードの時代ですがシニアの方達には亀のスピードでやるのだというその感覚が大切です。種をまいて芽がでるなど何ヶ月もかかるものです。ねばり強く、そして楽しくやることを考えていくことですね、そう思っています。

【加藤】では、最後に牟田さん。

【牟田】今堀池さんの言われたボランティアの責任という問題。ボランティアだからどうせ何も頂いてい

ないのだから今日はさぼろうとかかそうってしまったらボランティアは最期です。今おっしゃった責任という問題は物事をやる上でとっても重要ではないかと私も思います。それから今中さんがおっしゃったアンビシャス運動ですが何か聞き捨てならない言葉を聞いて、アンビシャスという言葉、私は気になるのです。皆さんご存知の方もおられると思いますけどクラークさんという方が“青年よ大志を抱き給え”とおっしゃってる、どういう大志であるかということは後で言うておられるのですね。それは人間としてあるべき全てを主張する大志を抱き給えということですね。だから人間としてあるべきことが損なわれている社会、それに対して人間とはこうなんではないのと主張する大志を抱き給えと言うておられるのであって私もそれにそって生きていますけれども世田谷では昨年ボランティア年だったのでボランティア協会として宣言をいたしました。さんざん考えた末に残ったのは「お互い様」という言葉です。お互い様宣言というのをいたしましてね、私に宣言文を書けと言われたので書いたのですが、私はここで何を書きたかったのかといいますと人間とは本当にひとりひとり違うし、違うから面白いし、それを平等という中で同じになろうとする発想がはびこってしまったがゆえに、子供たちは一寸自

分たちと違う子がいたりするとひがんだり劣等感をもったりいろいろしたりするのですね。しかし違うのです。その違いを認め合った時に平等ということがあるんですよという伝え方をこれからして頂きたいと思います。ここで一寸宣言文を読ませて頂きます。

『お互い様宣言：丘の上から眺めると人々はみんな同じに見える。丘をおりて人々の間を歩くとみんな違う顔をしている。心の中も違うのだ。その違いを、感じあったり認め合ったりするのが人間のおもしろさではないか。お互い人の出来ないことをする。ある時はあげたり、ある時はもらったりそんな信頼出来るお互いになるのが昔からあるお互い様、そんな社会を目指すのがボランティアじゃないの。またまたいいんだってお互い様じゃん』

そういう人間ひとりひとりが自分の思いをもって生きる社会づくり、ひとりひとりが思いをもっていればその思いは必ず繋がっていく、その思いをひとり楽しんでるわけにはいかない。それを他の方々とつながりながらその鏡をみながら人間というのはだんだんとその思いを深めていくのではないかと思います。頑張ってください。ひとつ皆さま頑張ってください。

■まとめ

【加藤】5人の皆さまにお話しをうかがって参りました。私なりに高齢化社会というものを考えますと、二つほどキーワードがあるような気がします。ひとつは若い世代から一緒になってagelessという社会を考えねばならないということではないでしょうか。今能力主義がどんどん会社に導入されていますが今までの年功序列が壊れていって、それぞれの年齢ではなくてそれぞれの個性、能力で適材適所に配置されていくという社会が幸せな社会をつくるよう

な気がします。その時にもうひとつ必要なのは共生という意識なのではないかと思います。違った個性同志がそれぞれの個性を認め合って共に生きていくという、そんな世の中が出来ていけば、とても幸せな日本になるのではないかという印象を持ちました。そう考えますと65歳という年齢は個性に過ぎないでしょう。これからも皆さまと世の中全体とひとりひとりの生き甲斐を考えていければよいと思います。本日はありがとうございました。パネラーにの皆さまに大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。5分位ありますので質問を受けさせていただきます。よろしく願いいたします。



■ 質疑応答

【司会】 質問を受けます。お一人様一問と挙手をお願いいたします。

【質問者(男性)】

退職して、シニアネット東京でパソコンを子供たちに教えています。小学生を教えるのはとても楽しいです。今年の正月息子達にお父さんはい



いね、年金で好きなことやっていて、俺達が歳取った時年金はもらえるかどうか分からない。お父さんのためになんで年金を払わなければならないのか。と言われました。子どものために自分たちは何が出来るのだろうか、教育を手伝ったり、地域の手伝いなど間接的なことはやっていますが、年金払う子どもたちがお父さんは自分たちのためにやっているなど感じてもらえることがあるのかなと、何か示唆があれば。

【加藤】 私などは大人が輝いていることが子どもたちへの一番の糧という気がします。社会保障の問題というのは、誰がこの後どう負担するんだと非常に難しい問題であって、実は私も

年金がない世代だと言われているぎりぎりのところですけども、いかがですか。



【堀池】 総合的学習でシニアの人が入ると子供たちは輝いていますし、きちんとしています。子供たちは学校の先生と違う環境を求めているのです。お母さんとだけ付き合っている中でお父さん替わりをしていくという意味がある。一つの例ですが三鷹では15人の先生の少学校に140人のサポーターが集まっています、NPOをつくりました。活動はいろんな事をして稼いで維持している。そういう活動も一つの手かなと思います。



【質問者(女性)】 町会をやっていますが若いお父さん達はなかなか集まらないんです。父親が出れば子どもが出るようになるのではないかと思うのですが何かいい方法はありますでしょうか。

【牟田】 スケジュール調整をなさったらいかがですか。お父さん達のスケジュールにあわせてミーティングをもってみるとか。はじめは3人でもがっかりなさ



らないで気長に…。

[今中] 工夫をして、やっていることは同じでも新しい装いでお父さんを引っ張り出してはいかががでしょうか。



[司会] 時間がきましたのでパネルディスカッションを終わらせていただきます。5人の方が退場されます。どうか大きな拍手をお願いいたします。

以上をもちまして本日のシンポジウムを終了いたします。最後までご参加いただきましてありがとうございました。どうかお気を付けてお帰りください。ありがとうございました。



…閉会。



閉会后、アンケートを
提出していただきました。
ありがとうございました。